さらいにヨシュての洗っさ芋や山盆りいなっている。顔 を上げると、カレアがカップを禁し出していた。中にお透 即な水依人にアパる。二人却交互コはッて多回し、殺きな 「小態しよう」

を黙引で述むのお心地負い。 巨ジェアお思みず、蹴笑ん笑。 **ラホホら水、土、 予酔の一部多小ちな代けて無い料知する。** 聞れないヨシュアに指導しつつの作業であったためざる?。 **ホンプの家の問囲お、映と遠いなっていす。 映の猫の間** ヨシュアとカレアは、井戸から扱ん党水を傾い撒いた。 それざせ締えるのに太陽な空の中天へ具ろうとしていた。

> すぐ煮えるよ」 「お昼は、豆と芋を煮ようかな? 採ったばかりだから、

シュアは睨んだ。 「……なんでもいいよ。お腹が空いて死にそうだから」 ヨシュアの言葉にカレブは吹き出している。その顔をヨ

るだけにする。安心して」 「ごめん。初日から大変だったよね。午後は、村を案内す

屠 どころ剥げ、中の身が白く光っていた。 芋の入ったたらいをニ人て近い シニャ 芋の入ったたらいを二人で運ぶ。濡れた芋は皮がところ

合語合 ------- 6 掛巾

「余分のネギを粉にかえてもらったんだ。芋も納めたかっ ヨシュアはカレブの抱えている袋を指さした。

仕込んでおいて明日、パンを焼こう」 たけど、もう少し乾燥させたほうがいいと思うから。今晩、 いる。みな白い体毛に覆われ、幼い子供の姿をしていた。 村には、カレブとヨシュアを含めて十二人の『人間』が

サトンちパアいか。曳電い直接、柴料を帰り込んが陳青外。

み式で並ふずいる。ひとでね大き〉、きで引さな小ち〉で

草を巨シュアの前へ点もお。そこはお、数字の『8』が

「きで三年と二七月、経ってる。ここ
3来てんら。 3はんら、

頭の中にだけある情報というものは非常に心許ない。し

鳴を上げた。

「止めて、止めて」

懇願するが、殴打は止む気配がない。

こともんは。気を見いまさゃって。知くは、きて朝間です 次ウと古脚を開き、脚を計ちす。 「はだくるとあるだけは」

は皿おこでき。 水酥や火のことお映力事な鷄はでアゆら鮨 「立から時、昼、麹のは茶汁よ。ここさもが砂糖でホッイみ しなるも即

ホンでお言醂を聞う。 壺と符らス瀬、金属の缶徐並ふず ||解腎しては休ないと知ら休いならなこて よら大変 げきの

てすべてが静寂に包まれた。

怒鳴り声と何かが折れる音、不規則な呼吸が続く。やが

·····・許して。……お願い」

咀嚼するような音とすすり泣きが辺りを圧していた。 「お願いだから。ちゃんとする。気持ち良くするから」

「ヨシュア、ヨシュア!

「さっきの何?」 村の周囲を包んでいる森は、昼でも薄暗い。

天を計ちしている。

「きみは?」

。 やいとはいい 「」、「ら」、「ら」 とはされている。 まるれていい まい

13

Eシェてむ、自分の 写動な 開助さ パアいる と 凝じる。 思 挙 「キノコ治あるといいんざけど。スープレスれるともごう 黒 さいい **** ヨシェアきたしてい読き、森のひんやりする土を踏みし 小麦饼の袋を蹲りしまり、森の中へ入っている。 い出そうとしてき像のとントは合わなかった。 「丸く数を式から姓えてはくは」 していなかった。 「おかいついま

まる 214

は J、 やな > とき / 如人 ご動 する や 見 多 社 C 人間 わ / す 立

八部い中を文化逃り急っている。 末い中を文化逃り急っている。

姿である。ECエてお、自大な筒を唖然と掴める知体です。 黒いき並である助お、エリやカレでとも行動はおい生き 「きみお黒いんさね。こんなの内めて見た。素強さなあ!」 このよい言いられず、「裕」の表面に誰を試みする。 筍に 十六帝の竣字依容依符、『邓盟宗了』と文字依け式はす。 高の表面お鏡となり、 ヨシェアの姿を刺し出す。 みきこの筒を抜けてきさんだ」

「カナンへようこそ! 心配しないで。ぼくたち仲間だよ」 目を覚ました若者をたくさんの生き物が覗き込んでいる。

足首から先だけは体毛がなく、滑らかな肌が露わになって いる手足は柔らかそうな白い毛で覆われている。顔と手首

彼らは、みな揃いの作業着を着ていた。衣服から伸びて

「ぼくの名前はエリ」 「……ぼくは?」

出せない。 名前の意味は理解していたが、若者は自分の氏名を思い

小ちな泣愚な囲むもではして三角屋財の家々と既な恵 | 長いすることないよ。それより、まわりを見て。ここは、 を脅化した。苦害幻思はも、目を背ける。致らしれ武以光 * き却むアいる。 激弾の舌 佐斉皆の口参加いぶ。 解し 徐顯氏よな。 神粉の沖こが置。 巻』 沈よ。 巨ジュア、 き なっている。その多ろい響着と森の木が依戴り、苔香の心 知くたちの材がよ。これからは、きんの材できあるは」 かまわないかな?」

「大丈夫だよ。神様の本できみの名前を決めるから」 座り込んでいる若者を助け起こし、エリは鞄から本を取

石柱の影を追う。目盛りを読んで数字を答えた。 「今日は良いお天気だから正確にやろう。カレブ、頼むよ」 「……ヨシュア。きみの名前はヨシュアにしようと思う。 エリと同じ生き物らしい一人が、草の上に屹立している

「うん、だって。……自分の名前を思い出せない」 頁をめくっていたエリは若者に尋ねる。

「時お、知〉依新けさゃに式むど、は昼却きも依めにては。 を働るた。と関し、対対に対し、対対に対し、対対に対し、対対に対し、対対に対し、対対に対し、対対に対し、対対に対し、対対に対し、対対に対し、対対に対し、対対に対し、対対に対し、対対に対し、対対に対し、対対に対

合而うね、

明手のない
素熱きの茶摘

花腸

反弦立

ですいる。 その関面に砂糖をひとつ落とし、カレブはヨシュアに喫茶

よしてお手を

減りながら

治国から

出了行った。

その

掌い

「そう、曳かった。様えないといけないことがよくちんあ るから。までお、はきて・キッチンで持ってるは」

ら渡された作業着に着替える。

置されている。 と椅子、ベッドの木枠や白と青の細かい格子柄の寝具が配 な高音が頭の奥で軋んでいる。 を起こし、額を押さえていた。金属をこすり合わせるよう 「うん。……たぶん」 「うなされてたよ。大丈夫?」 ヨシュアに確信はなかったが、そう答えた。パジャマか 質素だが、清潔な部屋にヨシュアは目を向けた。棚、机 薄く開いた視界にカレブの姿が映る。ヨシュアは上半身

よしてと呼ばれき主き物でよりの糊へかず、問題を示し